国立工芸館建物見学ツアー

令和元年１１月２３日（土）～１２月２日（月）

石川県、金沢市

移転概要

東京国立近代美術館工芸館の移転整備

東京国立近代美術館工芸館は、国の地方創生施策の一環である政府関係機関の地方移転の提案募集に対して、「工芸王国・石川」とも呼ばれる本県にふさわしい施設として提案した結果、これが認められて2016年3月に移転が決定し、日本海側初の国立美術館が誕生することとなりました。

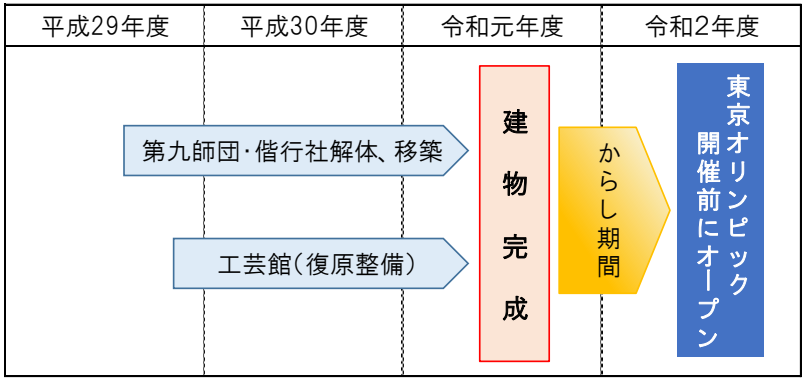
移転先となる建物は石川県と金沢市が協力して整備しており、国の登録有形文化財である旧陸軍の第九師団司令部庁舎と金沢偕行社を移築・活用し、過去に撤去された部分も含めて、かつてあった姿で復原しました。

今後、展示室や収蔵庫が適正な環境となるまでの「からし期間」を経て、東京オリンピック開催前のオープンを目指します。

東京国立近代美術館工芸館（東京都千代田区北の丸公園）

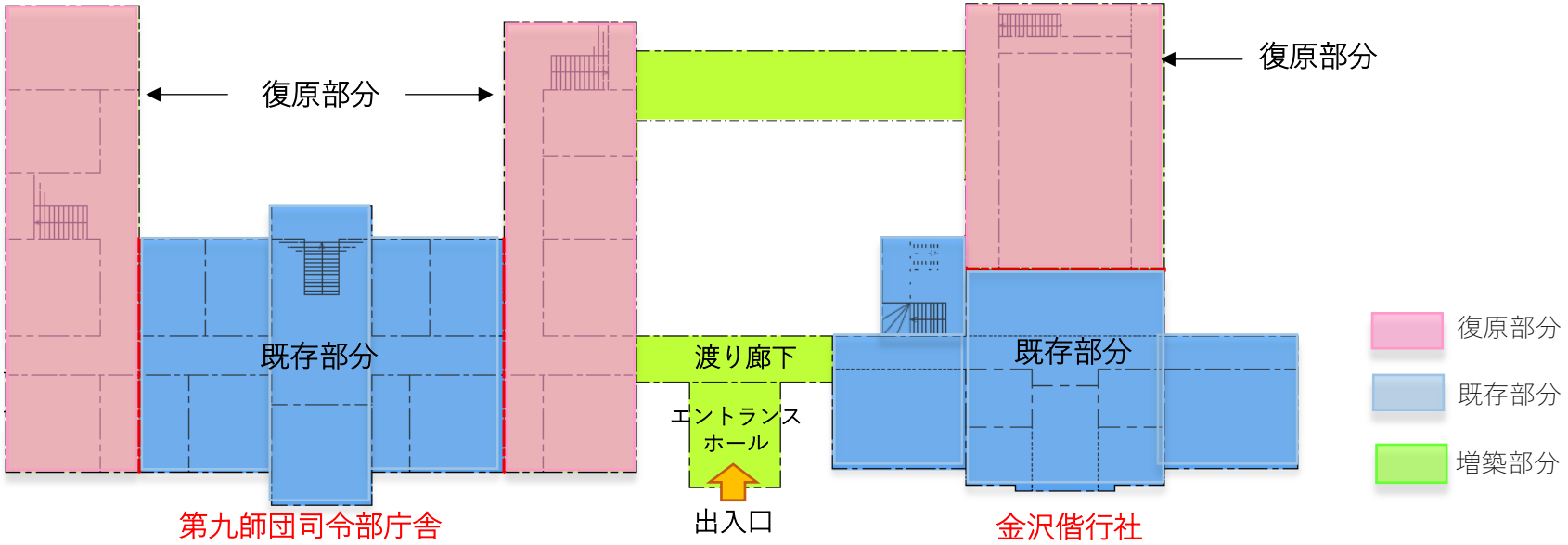
＜鳥瞰図＞

＜整備スケジュール＞



建物の概要

第九師団司令部庁舎
金沢偕行社


復原部分
復原部分
既存部分
渡り廊下
エントランス
ホール
既存部分
出入口
第九師団司令部庁舎
金沢偕行社
復原部分
既存部分
増築部分

第九師団司令部庁舎の変遷

明治42年　　「石川県写真帖」明治42年、石川県より

解体前

復原後

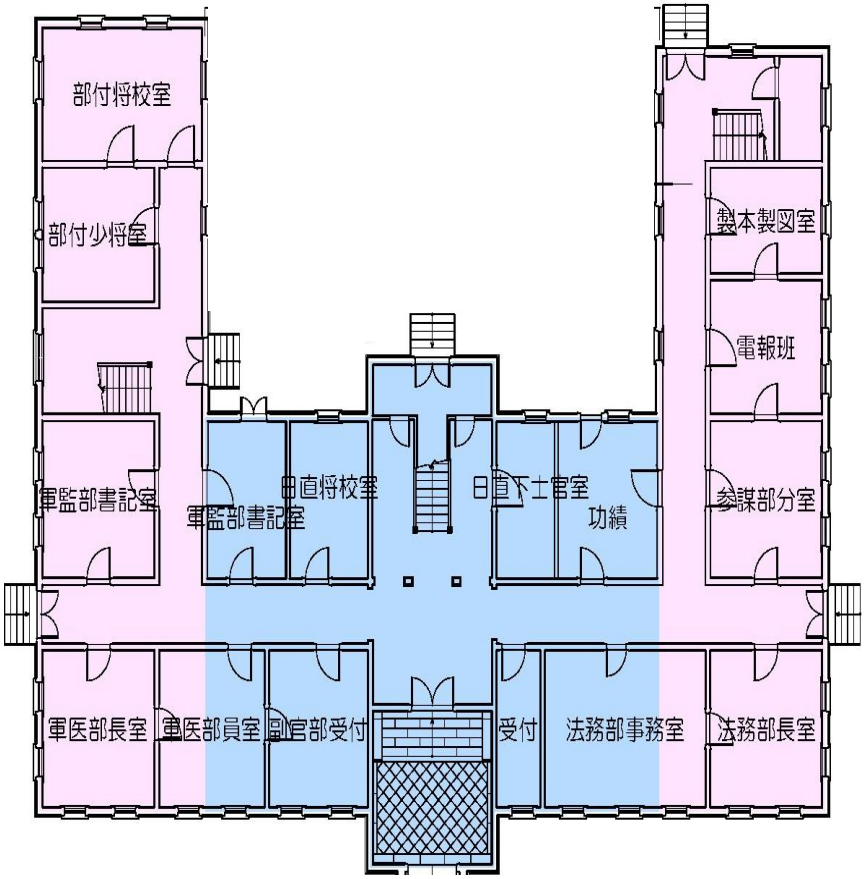
文化財区分	国登録有形文化財
年　　代	明治31年(1898) 金沢城二の丸跡地に建設、昭和43年(1968)移築
構造形式	木造二階建
建築面積	274.4㎡　　延べ床面積　549.0㎡
概　　要	近代洋風建築。全国でも数少ない明治期に建てられた旧陸軍の施設

建造物略年表

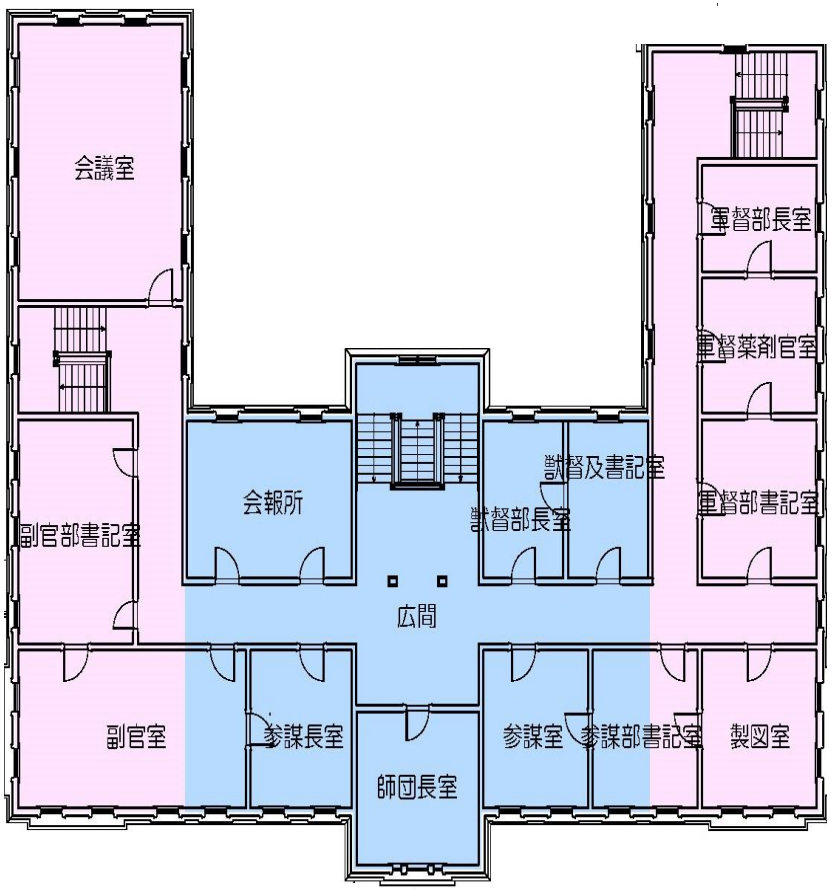
明治31年(1898)	金沢城二の丸跡地に建設
昭和24年(1949)	金沢大学本部として使用
昭和43年(1968)	県が建物を購入し、県立能楽堂横の敷地に移築。その際、両翼を撤去
昭和45年(1970)	石川県健民公社(石川県県民ふれあい公社)が使用
平成　9年(1997)	国登録有形文化財に登録
平成16年(2004)	歴史博物館収蔵庫として使用

第九師団司令部庁舎　平面図（建設当時）

１階



２階

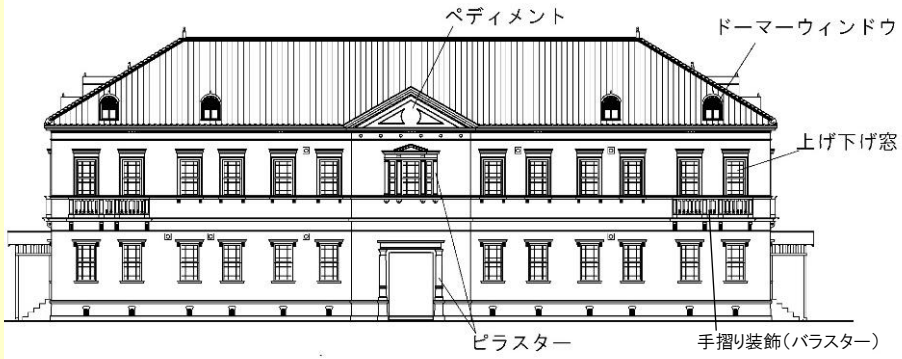


第九師団司令部庁舎　平面図（建設当時）
（明治31(1898)年～明治39(1906)年）

既存部分　復原部分

第九師団司令部庁舎の復原

＜復原後の外観＞



復原正面図

外観の特徴

左右対称の構成で、正面中央は付柱（ピラスター）、三角形の切妻壁（ペディメント）で表現され、二階正面と側面の角の上げ下げ窓下には装飾が施されるなど簡素なルネサンス風の外観をしている。

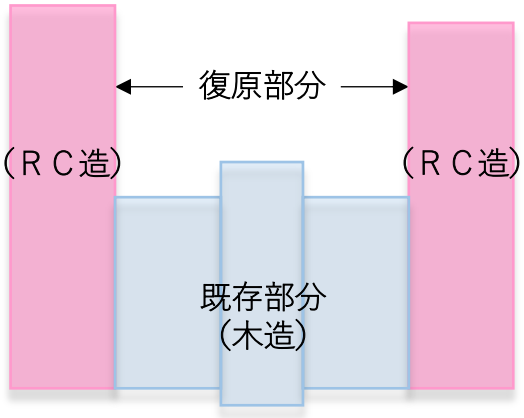
屋根は瓦葺で当初は、屋根から突き出した換気のための窓（ドーマーウィンドウ）が設けてあった。

庁舎のため偕行社に比べて質素な外観になっている。

＜外観の色の再現＞

建築当時の色を再現

	＜移築前＞		＜復原後＞
窓枠や柱の色 ：	薄桃色	→	こげ茶色
外 壁 の 色 ：	クリーム色	→	白 色



金沢偕行社の変遷

明治42年　　「金沢写真案内記」明治42年より

復原後

解体前

文化財区分	国登録有形文化財
年　　代	明治42年(1909) 建設、昭和45年(1970) 曳家
構造形式	木造二階建
建築面積	281.2㎡　　延べ床面積　544.1㎡
概　　要	近代洋風建築。全国でも数少ない明治期に建てられた旧陸軍の施設「偕行社」とは、陸軍の将校集会所(将校クラブ)のこと。軍装品の販売所や将校たちが娯楽に興じる遊戯室があったと伝えられる。

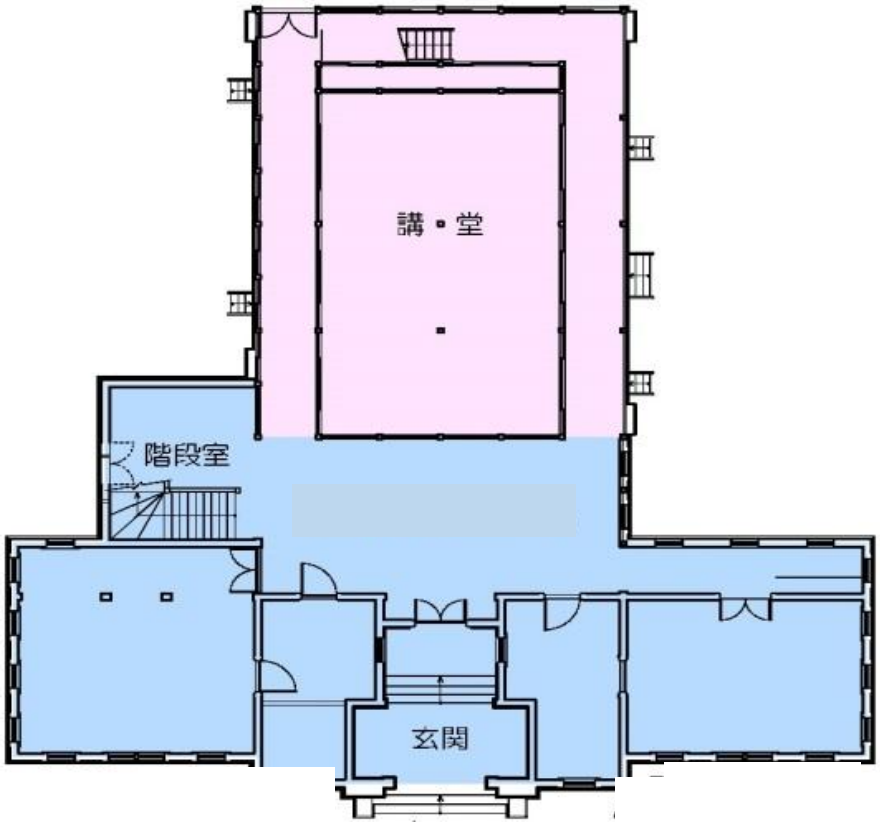
建造物略年表

明治17年(1884)	金沢偕行社創設(大手町)
明治42年(1909)	県立能楽堂横の敷地に建設(講堂として金沢城内の将校集会所を移築するとともに本館を新築)
戦後	財務局と国税局が使用
昭和42年(1967)	県が建物を購入
昭和43年(1968)	旧講堂部分を解体撤去
昭和45年(1970)	敷地内で曳家 郷土資料館(現:歴史博物館)の収蔵庫として使用
昭和55年(1980)	県公園緑地課が使用
平成　8年(1996)	石川県道路公社が使用
平成　9年(1997)	国登録有形文化財に登録
平成18年(2006)	歴史博物館収蔵庫及び能楽堂控室として使用

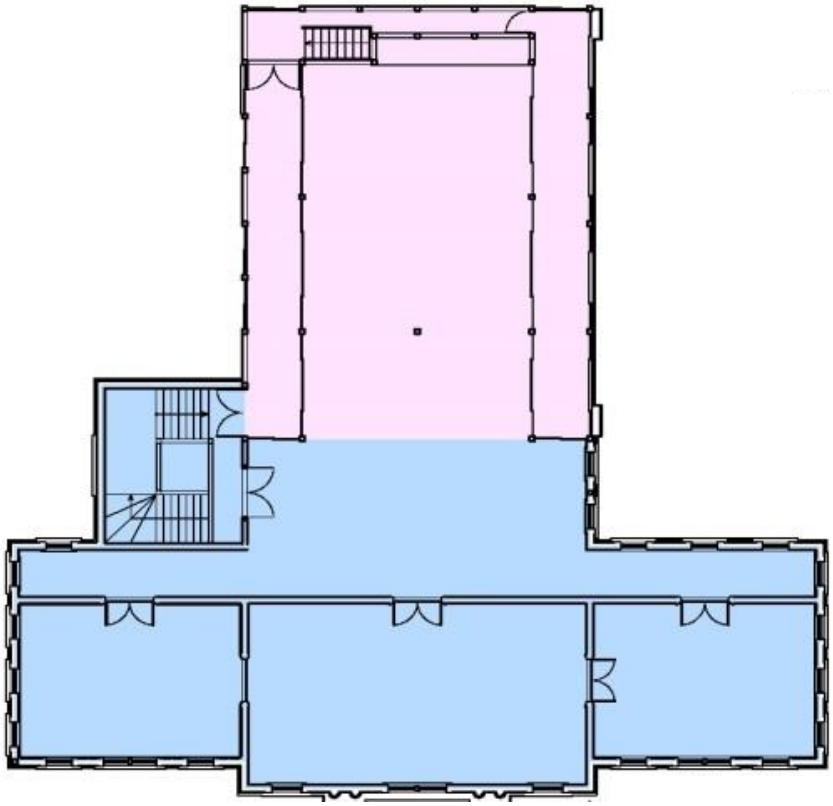
偕行社　平面図（建設当時）

偕行社とは、陸軍将校の社交場や集会所（将校クラブ）のこと。広間や食堂、遊戯室や貴賓室等が配置され、戦利品の陳列や軍装品の販売所、将校生徒試験場などの用途に使用。

１階



２階

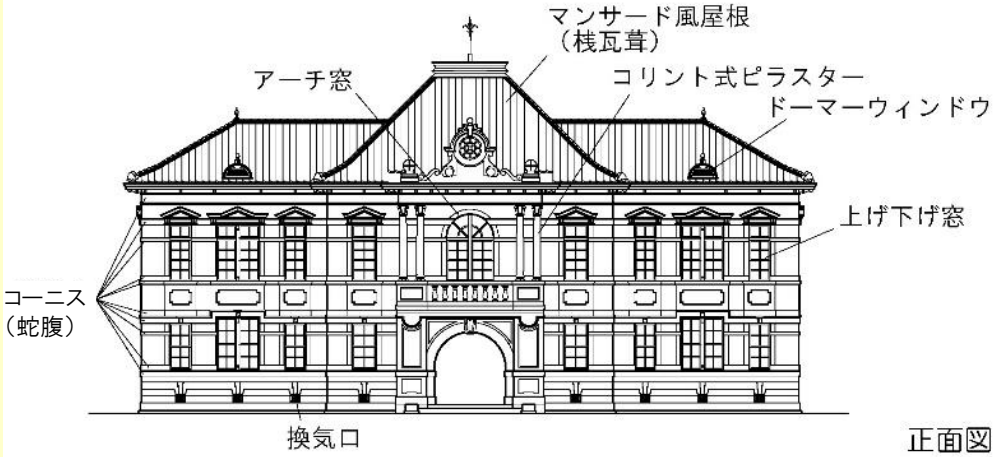


金沢偕行社　平面図（建設当時）
（明治42(1909)年～昭和24(1949)年）

既存部分　復原部分

金沢偕行社の復原（正面）

＜復原後の外観・正面＞



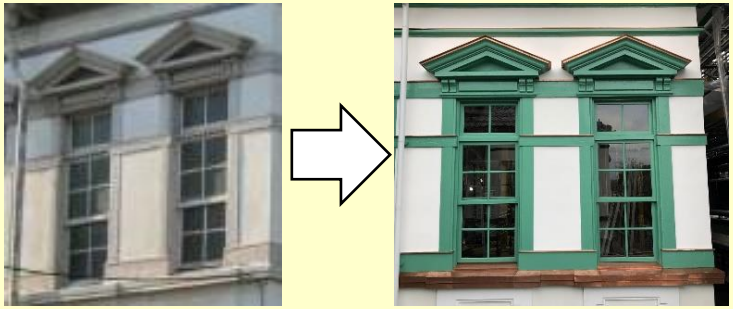
外観の特徴

明治31年に建てられた第九師団司令部庁舎に対して、金沢偕行社は11年後の明治42年に建てられており、主要な構造は類似しているが、外観の意匠に工夫をこらしている。

正面にアーチ形玄関、円柱形の付柱（ピラスター）、二階上部のアーチ窓、三角形のペディメントが付いた上げ下げ窓、横方向の部材（コーニス）を多く入れて水平線を強調するなど、バロック風の技巧的な装飾を用いた華やかな意匠としている。

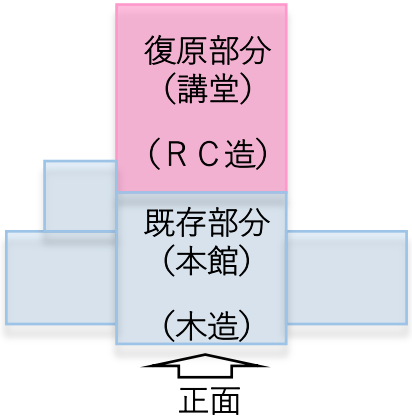
屋根は瓦葺で、中央部は急勾配で上部が水平になっているマンサード風屋根になっている。

＜外観の色の再現＞



建築当時の色を再現

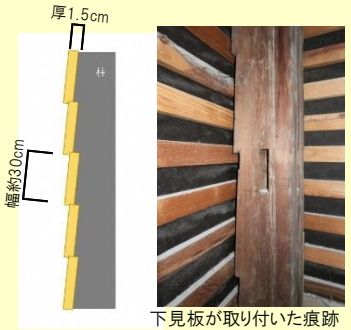
	＜移築前＞		＜復原後＞
窓枠や柱の色：	灰色	→	緑色



金沢偕行社の復原（側面）

＜復原後の外観・側面＞

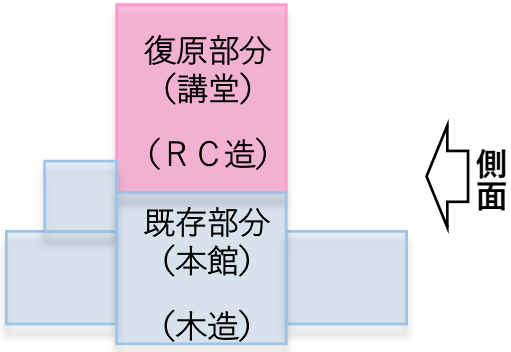
下見板（幅30cm×厚1.5cm）



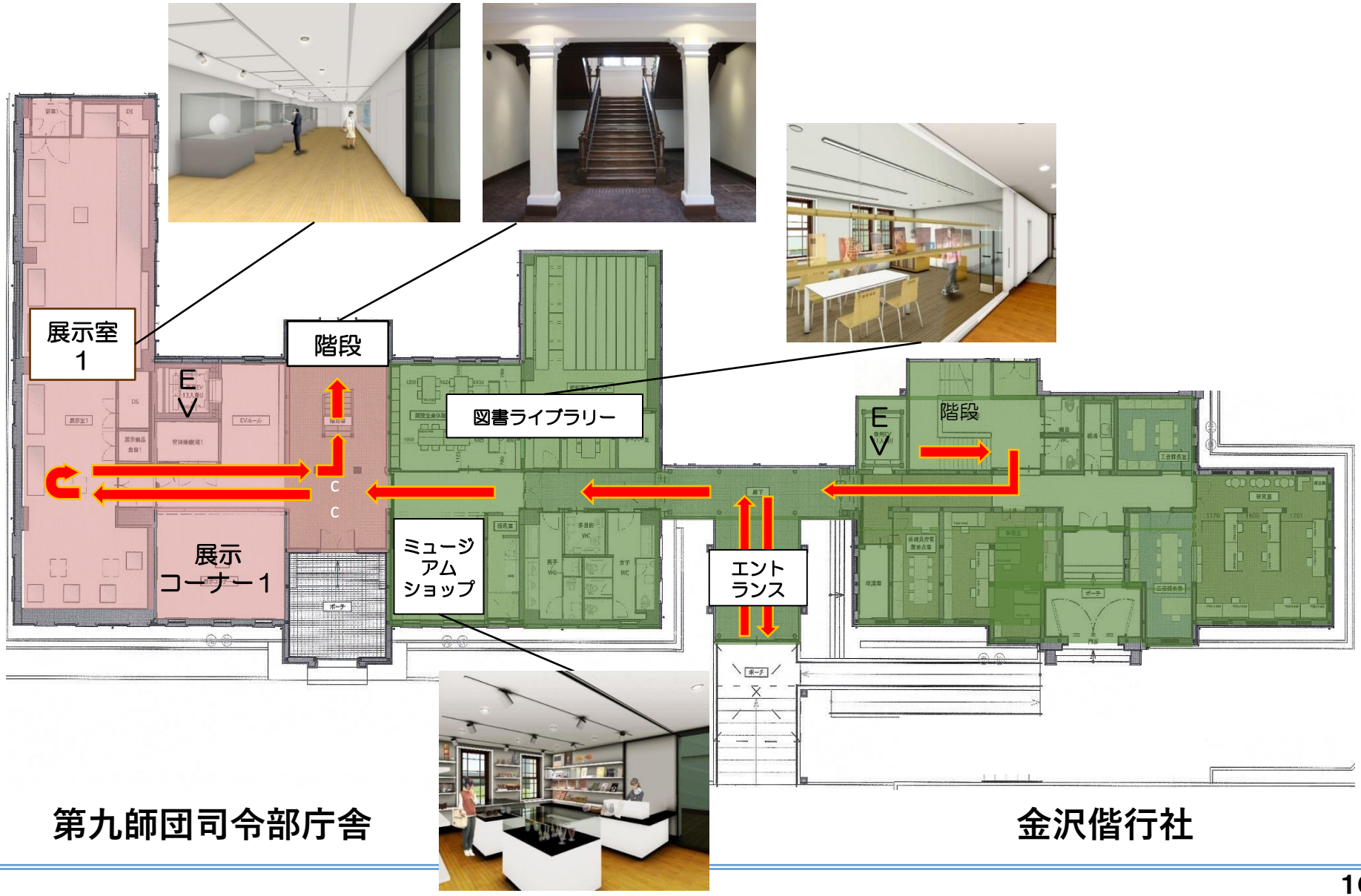
図面や写真から講堂の外観は、引き違い窓と下見板張りの板壁であると推察されていたが、解体工事により、柱に下見板を取り付けた痕跡が確認され、幅約30cm、厚さ1．5cmの下見板が取り付いていたことが判明。

換気口

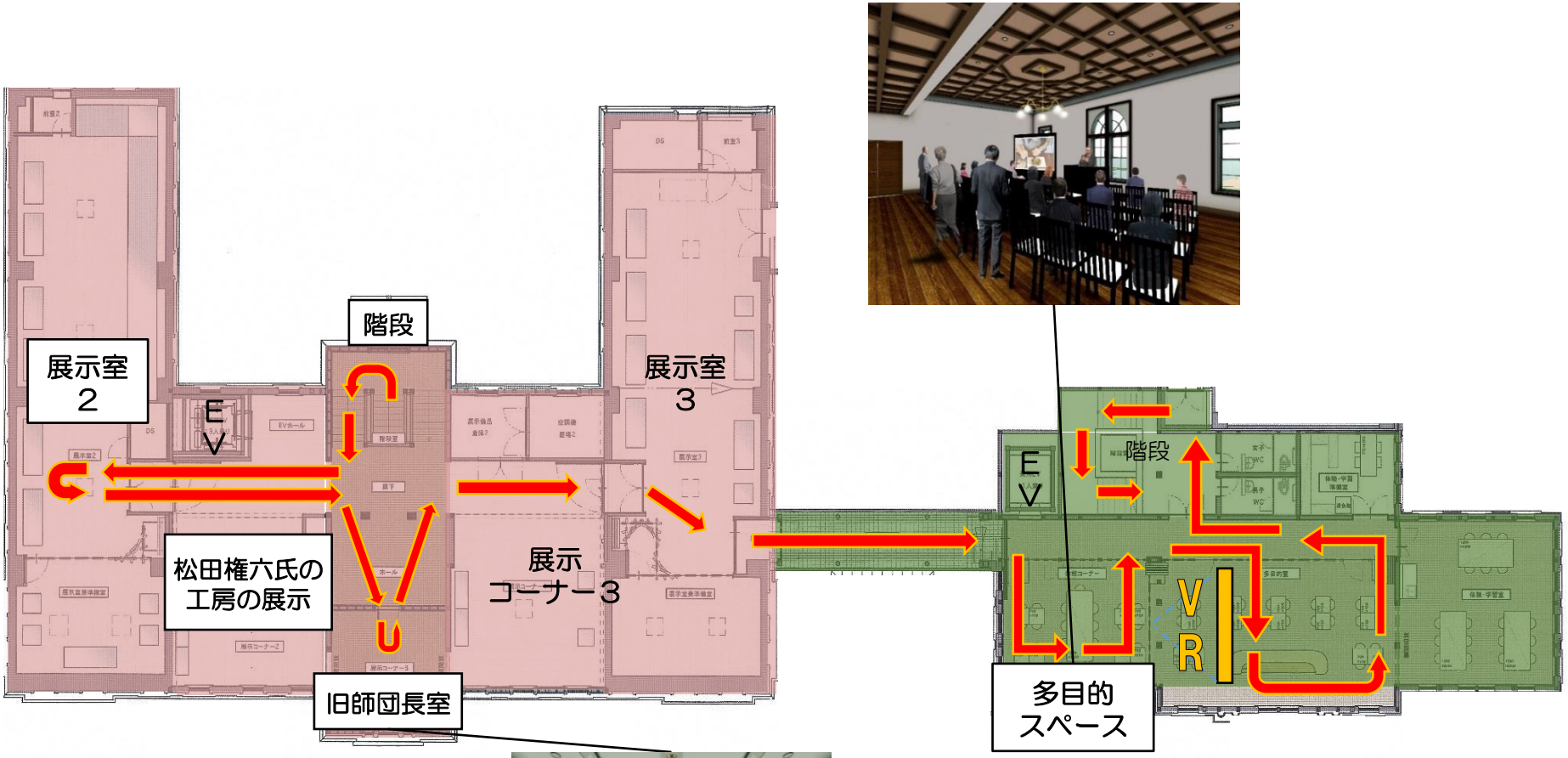
換気口には旧陸軍が使用していた星形の装飾が施されている



建物1階平面図（ツアールート）



建物2階平面図（ツアールート）



第九師団司令部庁舎

金沢偕行社

ミュージアムショップ、図書ライブラリー（第九師団司令部庁舎1階 ）

ミュージアムショップ

図書ライブラリー

- 展覧会図録やグッズ、工芸関連書籍、作家制作の作品を販売予定
- 全国の工芸作品が購入可能

- 閲覧室と書庫で構成
- 国内外の工芸に関する図書や資料を常時閲覧可

階段室（第九師団司令部庁舎1階）

柱頭飾り

階段室

天井の漆喰レリーフ

シャンデリア

階段踊り場

- 明治期の洋風建築の特徴的な意匠を移築保存
- けやき造りの重厚な階段
- 天井には漆喰のレリーフを移築
- アカンサスの葉をあしらった柱頭飾り
- 照明は現工芸館のシャンデリアを参考に復元

展示室（第九師団司令部庁舎1、2階）

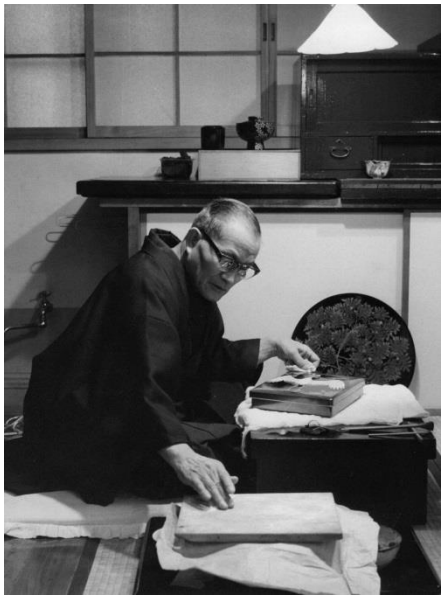
展示室

・展示室は１階に１つ、２階に２つ配置
（現工芸館より１つ展示室が増加）

・貴重な工芸作品を保護するため、建物の構造は
鉄筋コンクリート造としている

・多彩な工芸作品が際立つよう、天井や壁は白色で統一

松田権六氏の工房、旧師団長室（第九師団司令部庁舎2階）



松田権六工房の展示（制作風景）

- 石川県出身で工芸界の巨匠松田権六氏の自宅工房が移築され展示予定
- 松田氏の絵筆などの道具類を展示するほか、創作活動を映像で放映

旧師団長室（休憩室）

- 開館後は休憩室として使用
- 工芸館所蔵のデザイン性に優れた椅子を配置予定

多目的スペース(金沢偕行社2階)

移築前のホール

多目的スペース（活用イメージ）

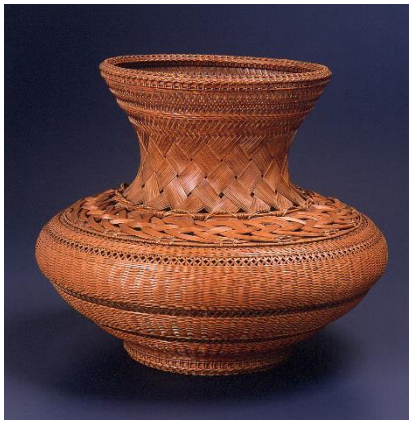
- 内装は格子状の天井や漆喰の壁など、明治期の洋風建築の意匠を復原
- 照明は、旧弘前偕行社のシャンデリアを参考に復元
- 講演会や体験イベントなどに活用

移転作品紹介（VR映像視聴）

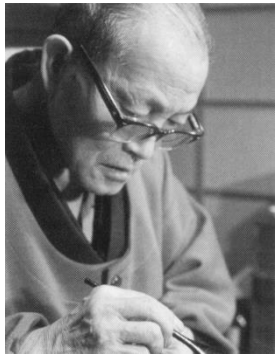
【紹介移転作品】※すべて東京国立近代美術館蔵

まきえちくりんもんはこ
蒔絵竹林文箱（1965年）

いろえきんぎんさいしべんかそめつけふうけいもじもんつぼ
色絵金銀彩四弁花染付風景文字文壺（1957年）

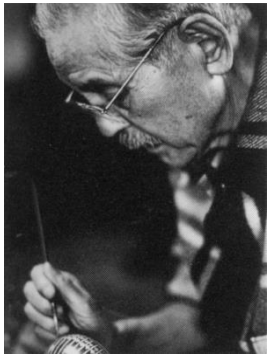


はなかご　ほうでん
花籃　宝殿（1948年頃）



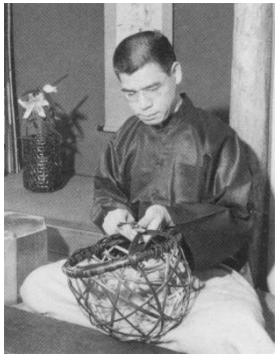
まつだ　ごんろく
松田　権六
(1896-1986)

石川県生まれ。人間国宝、文化勲章受章。古くからの優れた漆工品を調査研究し保存修理を重ねることで多種多彩で高度な技法を習得し、雅で格調の高い、個性豊かな作風を築いた。



とみもと　けんきち
富本　憲吉
(1886-1963)

人間国宝、文化勲章受章。九谷で色絵磁器の研究を行い、色絵に金銀彩を加えた羊歯（しだ）文や四弁花（しべんか）などの創作模様による、華麗で品格の高い作品を制作。



いいづか　ろうかんさい
飯塚　琅玕斎
(1890-1958)

近代工芸の重鎮。独創的で大胆な手法やきめ細かな編みの手法を自由自在に駆使して、格調高い作風で竹工芸を革新した。